

---

---

## ホットニュース(平成14年度／第50号)

---

---

### ●今月の業界ホットニュース／都市サポーター

今年は桜の開花が異常に早く、各地の桜祭りは大変だったようだ。わが社の近くの目黒川でも、恒例によって4月の第二日曜日に、川沿いの道路を歩行者に開放していたが、10日遅れの葉桜では逆に侘びしさが漂うばかりである。例年だとゴールデン・ウィークに満開期を迎え、100万人を越える観光客を集めている弘前などはどうなるのだろう。旅行会社の店頭には、連休に向けて弘前桜祭りへの誘いが溢れていたが、天候頼みのイベントを市場化する苦勞が窺える。

イベントといえば愛知万博で一騒ぎあったように、博覧会やオリンピックなどのビッグイベントが転機にある。内容のマンネリ化だけでなく、大規模化するにつれ市場規模が拡大し、逆に市場主義にのらないと維持できなくなっていることも一因であろう。

ところが寡聞の故か、サッカーのワールドカップではあまりその種の声が聞こえない。大規模市場化している面も多々あるが、市場主義を超える地域主義が強烈にサポートしていることによるのだろうか。

都市も持続可能であるためには、地域の人々が熱烈な都市サポーターになるような努力をする必要があると思う。

(代表取締役 堀田 紘之)

---

---

### ●道路交通情報の新たなビジネス展開

---

---

道路交通情報に関する道路交通法の一部が改正され、来月1日から施行される予定である。これにより原則禁止されている民間事業者による交通状況予測事業(「特定交通情報提供事業」という)が可能となる。国家公安委員会へ届出を行えば、既存の道路交通情報データの民間事業者への全面的な提供、ならびに民間事業者は独自に収集したデータを組み合わせる最短経路情報、交通渋滞予測、動的経路誘導といった高度な情報提供が可能となる。渋滞情報や目的地までの旅行時間、交通規制等の情報が適宜適切に提供されれば、ドライバーは快適かつ安心して運転することができるほか、道路交通全体からみて自律的な交通流の分散等を通じて、交通事故の防止、交通渋滞・交通公害の解消につながる。

現在、警察や道路管理者が設置した車両感知器等によって収集された道路交通情報が集約され、信号制御や道路管理のために用いられるほか、道路交通情報板等を通じてドライバーに提供されている。さらにこうして収集された全国の道路交通データが、日本道路交通情報センターに一元的に集約され、ラジオ放送等を通じてドライバーに提供される。民間事業者はこのデータを活用して各種事業を行っているが、交通状況予測については情報の乱立や誤情報をもたらす交通の安全と円滑への影響を考慮して原則、禁止されている。このように道路交通情報の提供が道路交通行政の一環として実施されてきたなか、カーナビゲーションや多機能携帯電話に代表されるIT機器の利用が活発化し、新しい需要を充足することのできる技術基盤が整ってきており、道路交通情報提供に関する制約緩和の不可欠との意見が産業界から出されたのである。新たなビジネスが展開できる環境が整備されることで、今後の産業競争による高度なシステムの出現が期待される。

(交通計画部 渡辺 明子)

---

---

### ●市町村の交通バリアフリー基本構想作成に関する出版

---

---

平成13年度末現在で市町村の交通バリアフリー基本構想が策定され、国が受理した件数は全国15都市ある。順番で列举すると、福岡県福岡市、北海道室蘭市、広島県呉市、千葉県千葉市、山梨県石和町、大阪府守口市、鳥取県鳥取市、新潟県亀田町、大阪府交野市、大阪府八尾市、大阪府堺市、北海道千歳市、東京都荒川区、福岡県大牟田市、千葉県船橋市の15都市である。法の趣旨から平成13年度中に策定した都市は多く、近々多くの都市が基本構想を公表し、国に提出するものと考えられる。

このような中、交通エコロジー・モビリティ財団(バリアフリー推進部)が、標記に関して書籍の発行を行うと聞いた。全体の構成は、第一部が「より良い基本構想作成のために(学識経験者で執筆)」で、第二部が「基本構想の先進事例(自治体等で執筆)」である。ちなみに先進事例の都市は、藤沢市、相模原市、荒川区、堺市、豊中市、船橋市、石和町の7都市である。

以上、出版に関する情報提供であったが、この先進7都市のうち相模原市と船橋市の2都市は、弊社が

コンサルタントとして協力した。

(都市計画部長 高尾 利文)

=====

●青年海外協力隊レポートvol.11－迷路都市「フェズ」の魅力

=====

モロッコの古都として有名な「フェズ」。最初に建設が始まったのは808年で、日本の京都とほぼ同じ頃である。フェズの建設は、フェズ川を底としてすり鉢状に広がる地形の、底から始まった。そのため、現在のメディナ(旧市街地)と呼ばれる地区は坂が多く、低いところに行くほど造られた年代は古くなるという。また、メディナは城壁で囲まれており、所々に門が配されている他は全て閉ざされているため、街中の迷路性を増している。

このメディナには、多くの遺跡が残されている。いや、今も使われているのだから、遺跡ではない。古い建造物も、修復を繰り返して今でも使っているのだ。例えば、カラウインモスク。人々の祈りの場である。9世紀に礼拝堂として建てられたが、その後改築され大学として使われていた時期もあり、世界最古の大学のひとつと言われている。また、マドラサと呼ばれる神学校。14世紀の建築で、壁面の彫刻やモザイクタイルなど美しい装飾が施されている。他にも、商人宿や各種の工房(陶器、なめし皮、染色など)など、様々なものがある。

しかし、フェズ・メディナの最大の魅力は、その活気ある日常生活風景にある。車も入れない狭い道の両脇に軒を連ねる商店街、時に身動きが取れないほどに溢れかえる人込み、人をかき分けながら進んでいく荷物を担いだロバや馬、またそれを曳く人の掛け声、喧騒、肉を焼く匂い、皮の臭い、動物の糞の臭い。いろんな要素の混じり合った混沌が、魅力となっているようである。

そのメディナも、あまりの人口過密のために、郊外へ住宅の建設を進め、移住を促進させる政策がとられている。そのような状況下での現在のフェズ・メディナの人口は約10万人と言われているが、申告されていない数も多いため、正確なところはわからないという。

(都市計画部 酒井 夕子)

アルメックホットニュース(平成14年5月15日発行)

////////////////////////////////////